ACTION

スワプナ

登場人物

安日彦	２５	修験者・老師の弟子
三浦　貞一	３２	東洋女子大学講師
山本　ユリ	１９	女子学生　モダンガール
ペテロ	３３	エルサレム教団
アンデレ	３４	エルサレム教団
ヤコブ	２８	エルサレム教団
ヨハネ	２５	エルサレム教団
フィリポ	３０	エルサレム教団
トマス	３１	エルサレム教団
老師	７８	武術家
講頭	７２	刀工・蘇芳古劔講講頭
太郎坊	３６	蘇芳古劔講行者
僧正坊	３４	蘇芳古劔講行者
次郎坊	１５	蘇芳古劔講行者　刀鍛冶見習い
唐沢　喜八郎	４６	特高警察
由良　幸吉	４２	特高警察
工藤　一郎	３４	特高警察
安東　好浩	３２	特高警察
アダム	３０	東洋女子大学講師　マッソン結社
綾乃	２５	国津教信者
教主	７０	国津教教主
多聞	３５	老師の弟子
住職	６５	
青年僧	２５	
神主	５０	
巫女	２３	

○　まだ明けきらぬ薄暗い空
昭和十年。七月。
雲がゆっくりと流れて行く。
ここから字幕が流れる。

×　　×　　×

『紀元前一二三〇年、約四〇〇年にわたり奴隷として労働を強いられていたイスラエル十二支族は、モーゼに率いられエジプトから脱出した。
シナイ山において、モーゼは神より啓示を受け「十戒石版」を授かる。そして神の命で聖櫃を建造し、「マナの壷」、「アロンの杖」と共に「十戒石板」を収めた。
モーゼは、聖櫃の蓋に飾られた二体の天使の間から語りかける神の声を聞くことができた。聖櫃を安置する幕屋には雲が覆い、夜になればそこに燃え盛る炎が見えた。イスラエルの民は約束の地をめざし旅をつづける間、幕屋から雲が上がると移動を開始した。
ヨルダン川は堤を超えんばかりに満ちていた。だが聖櫃を担ぐ祭祀たちの足が水際に踏み入れられると、遙か隣町で壁のようにそそり立ち水流が堰き止められられた。すべてのイスラエルの民たちは、聖櫃を担ぐ祭祀たちが立ち止まっている間に、水の引いた川床を歩き渡りきった。
最古の都市エリコでは高い城壁に阻まれていた。そこで、七人の祭祀が角笛を吹いて契約の箱を先導し、前後を兵士がかためて一日一回城壁の外を周った。七日目、七周続けて回ると角笛を吹き鳴らし、一斉に鬨の声を挙げた。すると城壁はたちまち崩れ落ち、イスラエルの軍はエリコ町を一気に攻め落とすことができた。
そしてイスラエル十二支族は聖櫃に導かれ、約束の地カナンへと四〇年の歳月をかける。
聖櫃は、炎と光を放ったとされ、恐るべき破壊力を持っていた。神の象徴である聖櫃とともにあれば、イスラエルは戦いに負けることはなかった。だが神の意に反すれば、聖櫃がその奇跡を見せることはなかった。
イスラエルはペシリテとの戦いに敗北し、聖櫃を奪われた。聖櫃はタゴンの神殿へと運ばれ、イスラエルの神がペシリテの神に屈服したとして貶められた。
ところが翌朝、聖櫃の前にうつ伏せ倒れていたのはタゴン神であった。驚いたペシリテ人はすぐに元通りに直すが、その翌朝、今度は頭、胴、腕が切り離された状態でタゴン神は倒れていた。
さらには町に疫病が発生する。聖櫃を別の町に移したが、そこでもまた疫病が広まった。恐れをなしたペシリテ人は、聖櫃をイスラエルへと送り返した。
聖櫃がもどってくるとイスラエル人は狂喜乱舞し喜んだ。しかし、そのとき聖櫃の中をのぞき見た多くの民が神の怒りにふれて死んだ。
紀元前一〇〇〇年頃、サウルを初代の王としたイスラエル王国が誕生する。
二代目の王のダビデは、イスラエル十二部族を支配し、エルサレムを首都に定めた。そし

てダビデは、これまでアビナダブの家に預けていた聖櫃をエルサレムに迎えたいと考えた。
アビナダブより引き取った聖櫃は牛車に載せて運ばれた。だが途中、牛がよろめいて聖櫃が落ちそうになり、それを支えようとしたアビナダブの息子のウザが神の一撃に打たれて死んだ。律法に反した聖櫃の扱いに、神の怒りは三ヶ月間続く。
やがて怒りが静まると、今度は律法に定められた通り、レビ人に聖櫃を担がせてエルサレムへと運んだ。
ダビデのあとを継ぎ王となったソロモンは、エルサレムのモリヤの丘に壮大な第一神殿を造営し、聖櫃を安置した。
ソロモンによって国は大いに繁栄するが、息子のレハベアムの代になると、それまで労役や重税で犠牲を強いられていた十支族が一斉に反旗をひるがえした。
紀元前九二八年、古代イスラエル王国は分裂。十支族からなる「北朝イスラエル王国」と、残る二支族からなる「南朝ユダ王国」とに分かれた。
紀元前七二二年、北イスラエル王国は大国アッシリアに滅ぼされ、十支族は奴隷として強制連行される。それ以降、十支族は行方が知れず歴史上から姿を消す。
紀元前五八七年、南ユダ王国は大国バビロニアの攻撃を受けエルサレムは陥落。ユダヤのシンボルである第一神殿は完全に破壊された。南ユダ王国は滅亡し、ユダヤの民はバビロニアへと連行された。
紀元前五三九年、バビロニアがペルシア帝国に敗北したことにより、半世紀に及ぶ捕囚生活を送っていたユダヤ人は解放された。帰還を許されたユダヤの民は、破壊された神殿を再建、第二神殿を完成させた。
しかし紀元六三年には、ローマ帝国に支配される。紀元六六年、ローマ帝国に対する反感から、ユダヤの民は反乱を起こし、第一次ユダヤ戦争が勃発。紀元七十年、エルサレムは占領され、第二神殿は無残に破壊された。
その後、一二三年にも反乱が発生し、一三五年にローマに征圧された。そして紀元一三五年、ユダヤ人は追放され、離散することとなる。
エルサレム陥落にいたる一部始終を目撃したユダヤ軍の元指揮官である歴史家は、神殿の至聖所に略奪するものは何もなかったと記録する。聖櫃のことに触れていない。
紀元前五八七年、バビロニアに征服されたとき、戦利品として持ち帰った財宝の一覧に聖櫃の記載はなかった。徹底して破壊された神殿といっしょに、そのとき壊されたか、あるいはそれ以前に神殿から持ち出されていたのか。聖櫃の行方はわかっていない。』

×　　×　　×

空がうっすらと明けて来る。
その空の下に鬱蒼とした森。
静寂の中、霧の中に二人の人影が浮かぶ。
修験者の安日彦（25）と老師（78）、互いに真剣を構え向かい合う。
風に揺れる木々。白い霧が流れる。

構えたまま、両者動かない。
白い霧があたりの樹木に流れてゆく。
雲が流れ、白い月が現れる。
×　　×　　×
タイトル『ＡＣＴＩＯＮ』
×　　×　　×
雑草が微風にゆれている。
木々の枝葉が静かな音を立てている。
月に雲がかかる。
安日彦と老師、二人穏やかに構えている。
雲が流れ、また月が現れる。
安日彦の表情が曇ってくる。
変わらない表情の老師。
安日彦の剣先が動くか動かないかの瞬間、すでにその喉元に老師の剣が止まっている。
崩れて膝をつく安日彦。
風にゆれる森の木々。流れる白い霧。

○　夜空に浮かぶ月

○　市街の道路（夜）
窓の幌を下ろした四台の大型バスが走り過ぎる。

○　道路Ａ
三台の大型バスが走り過ぎる。

○　道路Ｂ
道を封鎖している警官隊。
通りすぎる三台の大型バス。

○　道路Ｃ
道路を封鎖している警官隊。
十台のバスが合流し、走り過ぎる。

○　上り坂
通り過ぎる十台の大型バス。

○　電柱に上り、電話線を切断する警官。

○　国津教団・表

大型バスが止まり、警官が駆け下りてくる。

警官たちは腕に白布をまき、白襷をななめにかけ、草履を履いている。

教団を包囲する大勢の武装警官。

○　同・裏門

先頭にかけやを持った二人の警官。

その後ろに、今か今かとその時を待つ警官隊。

○　同・表門

特高課長の工藤(34)が腕時計に目をやる。

×　×　×

時計の針は午前四時半を指す。

×　×　×

○　同・表門

工藤「電報！　電報！（声を張り上げ合図する）」

黒門の左右に竹梯子をかける警官隊。

警官が素早く梯子を登り屋敷内に入る。

○ 同・裏門

工藤の声「電報、電報」

その声を合図に、かけやを持った二人の警官が、交互にかけやを振るい裏門を壊しにかかる。

その後ろで身構える警官隊。

○ 同・表門

表門が開き、一斉に突入する武装警官。

○ 同・裏門

裏門が打ち壊され、警官隊が突入する。

○　同・敷地内

慌ただしく行き交う武装警官ら。

×　×　×

雨戸を壊す武装警官。

壊した窓から建物の中に突入する。

×　×　×

かけやを振るい戸を打ち壊す武装警官。
壊した戸口から突入。

○　同・建物・中
廊下をさわがしく駆ける武装警官ら。

○　同・部屋・前
襖を乱暴に開ける武装警官。

○　同・中
眠そうに目をこすり起き上がる信者。
武装警官数名、容赦なく部屋に入り、信者を乱暴に引き立てる。

○　別の部屋の前
武装警官が乱暴に襖を開ける。

○　同・中
布団の上で抱き合って震えている女性信者たち。
乱暴に押し入る数名の武装警官。

○　同・敷地内
信者たちの悲鳴。警官の怒号。
信者たちを寝巻姿のまま、強引に連行する武装警官。
必死に抵抗する男性信者ら。

○　同・教祖の部屋・前
武装した特高警察の唐沢(46)が襖を開ける。

○　同・中
ふとんの上で顔色を変えることなく煙草をふかしている教主(70)。
唐沢「宮下だな？」
教主「うむ（とぼけた感じで）」
唐沢、後ろの武装警官らに合図する。
二人の武装警官が両腕を取って教主を引き立てる。
おとなしく従う教主の宮下。

○　同・敷地内

武装警官らに連行される数十人にも及ぶ信徒たち。

○　連なる山々（朝）
朝日があたりの山々に光を射す。
小鳥がさえずり飛び交う。

○　船盡神社・境内
古びた境内。
掃き掃除をする巫女(23)。
老師が歩いて来る。
巫女が軽く頭を下げる。
軽くうなずく老師。
頭に宝冠をした白装束の行者がやって来る。
行者、老師に書状を渡し、一礼して立ち去る。
老師、踵を返して歩き出す。

○　森の中
鬱蒼とした森の木々。
修験者の安日彦が潜み様子をうかがっている。
船盡神社が木々の間から見える。
書状を見ながら歩く老師の姿。

○　船盡神社・境内
書状に目を落とし歩く老師。

○　同・道場・前
歩いて来る老師。
弟子の多聞(35)が老師に一礼する。

○　同・境内
安日彦、素早く木陰に身を隠す。
気づかない掃き掃除の巫女。

○　同・道場・表
縁側から部屋に入り、文机の前に座る老師。
安日彦、道場の裏にすばやく隠れる。
開け放たれた部屋の様子がうかがえる。

○　同・天井裏
　全くの暗闇。
　天井板が静かに動き、下の部屋の様子が見えてくる。
　文机に向かって書き物をする老師。
　天井裏でそれを見ている安日彦。
　老師、やがて立ち上がり視界から消える。

○　同・表
　縁側から出てくる老師。
　立ち止まり盆栽をながめる。
　屋根の上から杖を振りかざし、安日彦が飛び降りてくる。
　老師、自然な感じですっと身をかわす。
　盆栽の棚に突っ込む安日彦。
　その音に神主と巫女が驚いて駆けてくる。
老師「（振り返ることなく）安日彦、使いを頼む」
安日彦「は、はい」
　立ち去る老師。
　多聞が書状を持ってやって来くる。
多聞「安日彦、これを届けてくれ。それからここきれいに片づけておけ」
　盆栽に突っ込んだままの形で書状を受け取る安日彦。

○　壮大な山々
　どこまでも嶺、白い雲がかかっている。

○　山道
　壮大な山々を背景に軽快に、山道を下りる安日彦。

○　森Ａ
　鬱蒼とした木々。小鳥の声。
　風にざわめく木々の葉。
　歩く安日彦。

○　森Ｂ
　岩の間から水が落ちている。
　手の平で水を受け、口にする安日彦。
　青葉が太陽の光を受けている。

忙しそうに動く小動物たち。
安日彦、口を拭い歩き出す。

○　段々畑
歩く安日彦。

○　山里Ａ
畑仕事をする村人。
遊んでいる子供たち。
歩く安日彦。

○　山里Ｂ
歩いている安日彦、只ならぬ気配に気づく。
そのまま歩きつづける安日彦。
突然、襲いかかってくる黒い修道服の修道士（エルサレム教団）。
レビ(22)、ヤコブ(28)、ヨハネ(25)、フィリポ(30)、トマス(31)が次々と襲いかかる。
安日彦、それをかわし走る。
追う修道士たち。

○　山里Ｃ
野良仕事の村人。
走り来る安日彦と修道士たち。
安日彦と修道士たち駆けながら攻防。
子供が振り返る先に、安日彦たちの姿はない。

○　森Ｃ
駆ける安日彦。追うヤコブとヨハネ。
フィリポが、木の上から飛び降り、安日彦を襲う。
安日彦、地面を転がり交わす。
目の前にトマスが構えている。
ヤコブが棒を打ち下ろし、安日彦の杖が二つに折れる。
通りがかかった柴刈りの老人が驚いて腰を抜かす。
安日彦と修道士たち、走りながらの攻防。
森の中を駆け抜ける安日彦。
攻撃する修道士たち。攻防を繰り広げる。
安日彦、目の前の崖に気づき立ち止まる。
振り返って構えるが、四人の修道士の姿はない。

立ち尽くす安日彦。

○　大衆食堂
広い店内。多くの客でにぎわっている。
東洋女子大学教授の三浦（32）が定食をむさぼっている。
着物の女性の綾乃（25）が三浦の隣の席に座り、気づかれないようささやく。
三浦、女給に代金をテーブルに置く仕草をして店を出ていく。
三浦が出た後、すっと立ち上がる男二人、特高警察の由良(40)と工藤。

○　街中
歩く三浦。
後をつける由良、工藤。

○　路地Ａ
路地を曲がる三浦。

○　路地Ｂ
三浦、路地を曲がると同時に走り出す。
路地を曲がる由良と工藤、三浦が逃げたと気づき走り出す。

○　路地Ｃ
三浦が逃げて来る。
由良と工藤が追いかけて来る。

○　路地Ｄ
逃げる三浦。
追う由良、工藤。

○　小さなキリスト教会・表
山の麓の道を走っる三浦。
小さなキリスト教会を通り過ぎ、また戻って教会の中に入る。

○　同・中
扉を少し開けて見る三浦。
追ってきた由良と工藤、そのまま行ってしまう。
アンデレの声「キリスト再臨のみが世界に平和をもたらす事ができるのです。今、ユダヤ人が再び

パレスチナに集結するという預言が実現されつつあります」
三浦、汗をぬぐいながら椅子に座り、ため息をつく。
教会内を見まわす三浦。
粗末な祭壇。町の人々がまばらに集まっている。
説教をする黒い修道服のアンデレ（34）。
アンデレ「それはキリストの再臨が近いことを示す前兆に違いありません。ユダヤ人は旧約聖書を
信じ、メシアを熱心に待ちつづけ、迫害と苦難の四千年を生きのびてきました。アッシリア、エジプト、ギリシャ、ローマなどが滅びた後も、イスラエルは未来の救済を信じ、生きのびて来たのです」
三浦から少し離れた席に縁の広い帽子のモダンガール（変装したユリ19）が座っている。
一息ついている三浦。その奥に座っているモガ（モダンガール）。
アンデレの声「世界中のキリスト教徒が、ユダヤがシオンに回帰できるかもしれないということに
注目しています。ユダヤ人がシオンに帰れば、キリスト再臨も実現するのです」

○　日本刀鍛錬場・前
静かな山の麓。
『日本刀鍛錬場』の看板。
その前に安日彦。槌音が響いている。

○　同・鍛錬場・中
二人の弟子と刀工が下鍛えの工程。
見事な手さばきで槌を打つ。

○　同・座敷
座っている安日彦。
襖が開きお茶を持って次郎坊（15）が入ってくる。

次郎坊「まもなく参ります」
次郎坊、安日彦にお茶を出す。
一礼して出て行く次郎坊。
聞こえていた槌の音が止む。
襖が開き、講頭（72）が入ってくる。
講頭「お待たせしました」
講頭、安日彦の前に座る。
安日彦「あの少年は？」

講頭「身寄りがなく行くところもないので、ここで見習いをやらせております」
　安日彦、書状を刀工の前に置き
安日彦「返事を持ってまいりました」
　講頭、それを開き
講頭「老師はお元気ですかな？」
安日彦「はい、相変わらずです」
　講頭、書状を閉じながら、
講頭「国津教が武装警官によって手入れされました。教主と多くの幹部が検挙されたと聞きます。まっ
　たく嫌な世の中です」
安日彦「そちらの講中の方も慌しいようですが……」
講頭「そう見えますか？　明治に発せられた神仏分離や修験宗の廃止から、我々は大人しくしてい
　るんですがね」
安日彦「山を下りてくる途中、黒装束の修道士に出くわしました」
講頭「それはおそらくエルサレム教団と名乗る者たちでしょう。彼らはイエス・キリストの直系の
　弟子、原始キリスト教徒の末裔と言っています」
安日彦「彼らの目的は何でしょうか？」
講頭「さあ、何でしょうな？」
　互いに探り合い沈黙が流れる。

○　同・表
　出てくる安日彦。

○　繁華街
　派手な女性たち、男、酔っ払い。
　色鮮やかなネオンが点灯している。
　行き交う人々。
　背広や着物姿の男性。
　若い商売女風の女性もいる。

○ ビヤホール・エレファント・表
　見上げる安日彦。
　『エレファント』の電飾の看板。
　訝しげに修験者姿の安日彦を見る通りすがりの人々。
　扉をあけ店内に入っていく安日彦。

○　同・中
　騒がしい店内。煙草の煙で煙っている。
　落ちつかない表情であたりを見まわす安日彦。
　テーブルで独り三浦がビールを飲んでいるのを見つける。
　案内に来たボーイを断り、歩いていく安日彦。
　憮然とした表情で座る安日彦。
　まわりのさわがしい客の声が一層やかましく聞こえる。
安日彦「なんだここは？」
三浦「こういう所の方がかえって目につきにくい」
　注文をとりに来たボーイに首を振り断る安日彦。
　去ろうとするボーイに、
三浦「（ジョッキを掲げ）あっ、これもう一杯」
　ボーイ、軽く頭をさげ立ち去る。
　あたりをうかがう安日彦。
　離れたテーブルに着物姿の怪しげな男（太郎坊36）。
　また別のテーブルに背広姿の怪しげな男（僧正坊34）がいる。
　教会にいたモガ（ユリ）が入ってくる。ボーイに席に案内される。
安日彦「怪しいやつがいる」
三浦「ここはまだ知られていない。安全だ。特高のやつらは巻いてやった」
安日彦「エルサレム教団とかいう連中が動いているようだが……」
三浦「やつら、あかし箱を狙っているんだ」
安日彦「あかし箱？」
三浦「十戒石板、アロンの杖、マナの壷を納めていたと言われるユダヤの至宝、契約の聖櫃のことだ」
安日彦「それはどういったものなんだ？」
三浦「川を干あげたり、町の城壁を崩壊させたり、敵に疫病を流行らせたりするほどの力がある。
　炎と光を放ったとされ、無闇に箱に手を触れれば誰であれ生命を奪われる。近づくことが許されたのは、特殊な衣装を身にまとったレビ人の大祭司だけだ。聖櫃を安置した幕屋には雲が覆い、夜にはその雲の中で 燃え盛る火が見えたという」
安日彦「それが本当だとしたら、この時代に見る兵器か特殊な装置のようだ。何千年も前に信じがたい話だ」
三浦「紀元前五八七年、バビロニアに攻撃によって南ユダ王国のエルサレムが陥落し、神殿が破壊された。そのとき契約の聖櫃はすでになかった。おそらくはヒゼキヤ王の時代、それを予見していた預言者イザヤが運び出したのではないかと思われる」
安日彦「それがここ日本にやって来たと？」

三浦「（ビールを飲み干し）日本にはそれを暗示させるものがいくつも存在する」
安日彦「たとえば？」
三浦「祭りの神輿だ。肩にかついで移動する神聖な社、形も大きさも聖櫃によく似ている。日本の盛大な 祭りのほとんどは、出エジプト以来のイスラエル民族の祭りを受け継いだと思われる。
日本とユダヤのただならぬ関係を思わせる共通点も数多い。音、酒、騒ぐ、畑、寺、学ぶなど、日本にはヘブライ語を語根とする言葉が千二百語以上もある。神道の神官は白い麻の帽子をかぶり、白い衣を着るが、古代イスラエルの神官が身につけていた白い服と全く同じだ。お前のその頭の兜巾も、ユダヤ人が祈りのときに額につけるヒラクテイリーというものそっくりだ」
安日彦「それでエルサレムの動きは？」
三浦「三日後までに渡せ、と。さもないと強攻策に出る、と」
　ボーイがビールジョッキを持って来て、去って行く。
　そのビールをグイッと飲む三浦。
安日彦「……でそちらの用件とは何だ？」
三浦「ああ、そうだった。日沖文書と呼ばれる古文書のことだ。五世紀の後半に神代文字の原文から漢字カナ混じりに書き改めたといわれる。日本最古の文書とされる古事記より二百年以上も前のことだ。文書は巻物状にして、銅管に入れ油紙をかぶせ、壺や瓶に収めて、土中深く埋めて保管してきた。この文書を守るために過去には、何人もの人たちが命を落としたという」
安日彦「で、その古文書がどうした？」
三浦「武装警官の襲撃のときに押収された」
安日彦「それを取り返せというのか？」
三浦「いや違う。日沖文書は国体歴史篇、神伝秘法篇、兵法武教篇と外篇とからなっているが、外篇の一巻がすでになかった」
安日彦「手入れ前に何者かによって持ち去られていたと？」
三浦「そうだ。それを探し出してほしい。それには消えたイスラエルの十支族のこと、そしてあかし箱のことについて触れられている」

○　東洋女子大学・全景

○　同・校内Ａ
おしゃべりしながら行き交う女学生。
人目を避ける三浦。あたりをうかがいながら校舎に入る。

○　同・校舎内
おしゃべりしている女学生。
隠れながら階段を上る三浦。

○　同・二階
あたりを気にしながら、三浦が階段を上がって来る。
廊下には誰もいない。
ある部屋の前に立ち、ドアの鍵を開けようとする三浦。
その後ろに人影が近づいてくる。
気づかない三浦。
アダムの声「三浦先生」
驚いて振り返る三浦。
そこに英語講師のアダム（30）が立っている。
ほっとする三浦。
アダム「気をつけてください。特高警察があなたを捜しています」
三浦「ああ、わかった。ありがと」
足音がして振り返る三浦とアダム。
そこに特高の由良と工藤が歩いて来る。
由良「三浦だな」
走って逃げる三浦。
追う工藤と由良。
成すすべなく立ち尽くすアダム。

○　同・下の階
階段を駆け下りてくる三浦。
驚いて足を止める女学生。
続いて由良と工藤が下りてくる。
何事かと見る女学生。

○　同・校内Ｂ
　女学生の中をかき分けて逃げる三浦。
　女学生をかき分け追う工藤と由良。

○　同・校内Ｃ
　女学生数名の間を割って逃げる三浦。
　追う工藤と由良。
　目で追う女学生のユリ。

○　同・物置小屋・前
　走って来た三浦が立ち止まってあたりを見る。
　物置小屋の前に停めた自転車をどけ、扉を開けて中に入る。

○　同・中
　外光が張り合わせた板の隙間から射し込んでいる。
　薪、炭、雑具、筵などいろんな物が置かれている。
　壁板の隙間から、工藤と由良が走って来るのが見える。
　工藤と由良、足を止め、あたりを見まわしている。
　三浦、ドアがあることに気づく。
　ノブを引いて開けようとしたところ、ドアは立てかけてただけで、三浦に向かって倒れてくる。
　あわててドアを支えようとするが、大きな音をたててしまう。
　壁板の隙間から外をうかがう三浦。
　行きかけた由良と工藤が物音を聞いて引っ返して来る。
　あせる三浦。扉を開けようする由良が、板壁の隙間から見える。
　内側から開けさせまいと扉を引っ張る三浦。
　三浦の額と手に汗が光る。
　女性の短い悲鳴がし、壁板の隙間に女学生が現われる（ここではユリとはわからない）。
由良の声「どうした？」
ユリの声「（指差して）いえあの、三浦先生がすごい勢いで走って来られたものだから、驚いて思
　わず……」
　由良と工藤が目を見合わせ、校舎の方へと走って行くのが、壁板の隙間から見える。
　腕の力を緩め、ため息をつく三浦。
　ユリが物置に近づいて来る。
　壁板の隙間から顔は見えない。
　ユリの肩まである髪と顔の一部が見える。

ユリの声「もう大丈夫ですわ三浦先生。これは貸しということにしておいてあげますわ」
　ユリ、去って行く。
　三浦、ドアを開けようとするが開かない。
　隙間から見ると扉の鍵がかけられている。

○　同・表
　扉の隙間からベルトの先が出てきて、掛け金を外す。
　扉が開き、三浦がベルトを直しながら出て来る。
　見ると、ユリの後ろ姿が校舎に消えて行く。

○　国津教団・表（夜）
　歩いてくる安日彦。立ち止まり高い塀を見上げる。

○　同・中
　身軽く塀を乗り越える安日彦。
　身を低くし、あたりをうかがう。
　誰一人いない。静けさが漂よう。
　　あたりに気を配りながら歩く。
　　燈籠は倒れ、社殿も壊されている。

○　同・古井戸・外
　鬱蒼とした木々に隠されるように古井戸がある。
　蓋を開け、松明に火をつけ、井戸の中に落とす。

○　井戸・中
　井戸の中を落ちて行く松明。水のない井戸底に落ち燃え続ける。

○　井戸・外
　ロープをそばの木にくくりつけ、井戸の中に下りて行く安日彦。

○　同・中
　ロープをつたって底まで下りる安日彦。
　投げ入れた松明を拾い、あたりを照らす。
　側面の積み石が崩れ、奥に空間がある。
　安日彦、奥の空間に身体を押して入る。

○　同・中の空間

いくつかの大きな壷が割られ転がっている。
中を見ると何もない。
ひとつ足跡が残っている。

○　同・外
井戸から上がろうとして顔を出す安日彦。
唐沢の声「よし、そのまま動くな」
動きを止める安日彦。
見ると特高警察の唐沢が拳銃を構えている。
その後ろに、安東(32)と数十人の警官が取り囲んでいる。
唐沢「ゆっくり出て来い」
ゆっくりと井戸から出てくる安日彦。
しかしそのまま止まることなく唐沢に近づいていく。
唐沢少したじろぎ
唐沢「止まれ！」
唐沢、引き金を引こうとする。
その瞬間、唐沢に触れたかと思うと投げ倒している。
銃声があたりに響く。
向かってくる警官隊を、次々と投げ倒していく安日彦。
逃げる安日彦。
警官が立ちはだかる。
安日彦、その警官たちを一瞬にして倒す。
さらに、安日彦の前に警官が現われる。
はじき飛ばして駆け抜ける安日彦。
後ろからも警官が追って来る。
横からもやって来る。
合気道的な技と当て身で次々と倒して行く。
いっせいに向かってゆく警官隊、それをあざやかに投げ倒す安日彦。
投げる安日彦。ふっ飛ぶ警官。

○　同・内
茂みに飛び込み隠れる安日彦。
安日彦を見失う警官隊、あたりを捜している。

○　同・屋根の上
屋根に出てくる安日彦。
その下では警官が安日彦を捜している。

　安日彦、ため息をつく。
ペテロの声「なかなかの腕だ」
　驚いて身構える安日彦。
　黒い修道服の修道士ペテロ(33)が屋根の上に寝転がっている。
安日彦「誰だ！」
ペテロ「(寝転がったまま)見ての通り、ただの修道士だ」
安日彦「こんなところで何をしている」
ペテロ「星を見ている」
安日彦「星？」
ペテロ「ほら見てみろ。きれいな星空だ」
　思わず空を見上げる安日彦。
　空には落ちてきそうな大きな星が輝いている。
ペテロ「問題は古文書がどこに行ったかだ」
安日彦「なぜそれを……」
ペテロ「その在り処は限られた者しか知らなかったはずだ。ここで言える事は持ち出したのは僕で
　も君でもない。そして警察でもない。だとすれば誰だ。教団内部のものか？　古文書が取り出さ
　れたのはつい最近のことだ。犯人は警察が教団を手入れすることを知っていた者だとも思われる
」
安日彦「貴様何者だ！」
ペテロ「そんなことを知りたいか？　それじゃ、まあペテロと呼んでくれ。安日彦」
　下では警官隊が安日彦を探しつづけている。
ペテロ「（身を起こしながら）さて」
　警戒する安日彦。
安日彦「エルサレムの者か？」
ペテロ「この星の下では民族も宗教も意味なんてない。みんなが兄弟だ。争いなど愚かしい。ほら
　見てみろ、星はあんなに輝いている」
安日彦「はぐらかすな」
ペテロ「君とはまた会いそうな気がする。またな兄弟」
　ペテロ、屋根から身軽に飛び降り、すばやく敷地内を走り去る。
　それ見ている安日彦。
　ふと地上の安東と目が合う。
　安東、そばにいた警官の一人に耳打ちをする。
警官「屋根の上だ！　屋根の上にいるぞ！」
　警官が集まってきて、たちまち慌しくなる。
　安日彦、あわてて屋根から飛び降りる。

○　カフェ・モンテカルロ
　三浦、新聞を広げコーヒーを飲んでいる。
　窓の外は強風が吹いている。
　　×　　×　　×
　新聞記事
　教主竹内を検挙。
　不敬の謀略をたくらむ国賊。
　国津教に鉄槌下る。
　国体変革、皇位簒奪を企み。
　などの見出しと写真。
　　×　　×　　×
　着物の裾を押さえ、綾乃が店に入って来る。
　そして三浦の後ろの席に座り、ささやく。
綾乃「教主は中立警察署の留置場よ。教主の一族や幹部たち、二百名が検挙されたわ」
　　新聞を閉じ、席を立つ三浦。

○　路地
　強風が吹き荒れる。
　三浦が歩く。
　後ろから由良と工藤が追いつき、三浦の肩に手をかける。
　三浦、振り払って逃げる。
　追う由良と工藤。

○ 道
　逃げる三浦。
　追う由良と工藤。

○　別の道
　逃げる三浦。
　追う由良と工藤。

○　廃工場・表
　逃げ込む三浦。
　追って来る由良と工藤。

○　同・内

見失い立ち止まる由良と工藤。
三浦、物陰に隠れ息を殺している。
工藤、逆の方に走って行く。
動かず、じっとしている三浦。
由良が近づいてくる。
工場の錆びた機械の数々。
工場の建物に射すまぶしい太陽。
三浦、目を閉じる。

× × ×

建物の陰に隠れた太陽。
静かな工場内。
由良と工藤の姿も見えない。
三浦、ゆっくり立ちあがる。
気配を感じ、動きを止める三浦。
ゆっくりと振り返る三浦。
いきなり殴られ倒れる三浦。レンズに亀裂の走った眼鏡が転がる。

○　キリスト教会・表
強風の中、教会の前に立つ安日彦。
扉を開け中に入る。

○　同・中
薄暗い教会内。誰もいない。
強風にガラスが震えている。
歩く安日彦。

○　同・裏
裏口から出て来る安日彦。

○　森へ入る小径
あたりを伺いながら奥へと入る安日彦。

○　森の中
安日彦、足下を注意深く見ながら歩く。

○　険しい岩場
斜面を登る安日彦。

○　森の中の草原
安日彦、足下を見ながら来る。
鬱蒼とした木々が途切れ、広い空が現われる。
草原の中に朽ちた赤レンガの修道院がある。
所々損壊し、人の気配はない。

○　修道院跡・敷地内
歩く安日彦。

○　同・別の敷地内
歩く安日彦。

○　同・敷地内Ａ
やって来る安日彦。
目を閉じ静かに瓦礫に座っているアンデレ。
安日彦、距離を置いて立つ。
アンデレ、目を開けると、静かに立ちあがり、建物に入って行く。
安日彦、後を追う。

○　同・部屋・前
ゆっくり歩く安日彦。
部屋の前に立ち、壊れかけたドアを開ける。

○　同・中
割れた窓ガラス。荒れ果てた部屋。
誰もいない。

○　同・廊下
歩く安日彦。
次の部屋のドアを開ける。

○　同・次の部屋・中
荒れ果てた室内。誰もいない。

○　同・廊下
歩く安日彦。

その次の部屋のドアを開ける。
部屋に入ろうとしたとき、いきなりアンデレの蹴り技が飛んで来る。
胸に受けて吹っ飛ぶ安日彦。
倒れた安日彦に攻撃するアンデレ。
かろうじて交わす安日彦。
アンデレ、攻撃を続ける。
受身一方の安日彦。
アンデレの攻撃を受けて倒れる安日彦。
倒れている安日彦を見下ろすアンデレ。
起き上がろうとする安日彦。
その横をゆっくり歩いて、表に出るアンデレ。
安日彦、起き上がり後を追う。

○　廃工場・中
三浦を乱暴に連れてくる由良。その後ろから工藤。
広々とした工場内。
三浦に暴行を加える由良。
それを見ている工藤。
三浦を殴り蹴る由良。
三浦、倒れたまま動かなくなる。
由良「貴様が出入りしていた国津教は、思想や信条を異にした危険人物の巣窟であり、宗教面のみ
ならず、社会面でも広い影響を与えようとするものであった。農村救済を掲げ、機関紙では、農村未曾有の窮状とか、現代の不祥事なりとか、天日をおおう暗愚の偽政者といった調子で、政府の無能ぶりを容赦なく批判した。そして右翼と気脈を通じ、全国の信者から吸い上げた巨額の金を軍資金として右翼に流す。表では皇室中心主義をとなえ、裏では不敬の謀略をたくらみ、国体変革の野望や武装蜂起を企んでいた」
三浦「そんなのでたらめだ」
三浦に蹴りを入れる由良。
由良「さらには、神道、仏教、キリスト教、回教、道教などすべての宗教は同根だとほざき、挙句
の果てには、日本とユダヤが同じ先祖だと言って世の中を混乱させようとした」
煙草に火を点ける由良。
由良「ユダヤ人は何百年も前に、世界を征服してユダヤ人の独裁者を擁立する目的で謀議をおこな
った。その報告記録がシオン賢者の議定書だ。お前も知らぬはずはない」
三浦、顔を上げ由良を見る。

由良「陰謀を練っていたユダヤ人の賢者たちは、社会をうまく統治できるのは独裁者だけで、強制
だけが社会秩序を維持することができると信じた。世界を統一して支配するために、ユダヤ人は資本力にものをいわせ、すでに衰弱している非ユダヤ人の国々を滅ぼす。まず、うわべは自由主義と民主的制度を支持するかのように見せかけるが、これは紛争と混乱をまねくための仕掛けにすぎない。なぜなら多元主義と民主主義はかならず紛争と混乱をもたらすものだからだ」

上体を起こそうとする三浦。

振り返りざま蹴りを入れる由良。

倒れる三浦。

○　修道院跡・敷地内Ｂ

出てくる安日彦、あたりを見まわす。

修道院の奥に歩いていくアンデレ。

安日彦、後を追う。

○　同・敷地内Ｃ

安日彦やって来る。

アンデレが立っている。

アンデレ、足元の長い木の棒を拾い、安日彦に攻撃しかける。

下がりながらかわす安日彦。

安日彦、竹箒に気づき、それを拾い地面に叩きつける。竹の竿の部分だけが残る。

竹竿で打ちかかる安日彦。

アンデレ、棒で防御し攻撃する。

アンデレの棒を安日彦が蹴り折る。

アンデレが折られた木の棒をそれぞれ両手に持ち攻撃を続ける。

一進一退。

○　同・敷地内Ｄ

左右の棒で攻撃するアンデレ。

安日彦、竹竿で攻防。アンデレの左手の棒を払い飛ばす。

アンデレ、残った一本で応戦する。

一進一退。

安日彦、アンデレのもう一本の棒を払い飛ばす。

素手になったアンデレに竹竿で容赦なく攻撃する安日彦。

アンデレ、花壇の鉢を安日彦に投げる。

それを竹竿で叩き割る安日彦。

走り出すアンデレ。

安日彦の竹竿が割れている。
竹竿を捨て、後を追う安日彦。

○　廃工場・中
倒れている三浦。
そのそばに立つ由良と工藤。

由良「東洋を搾取する米国は、人民本位の国であるなどとは真っ赤な嘘で、実態は金持ちによる、
金持ちのための、金持ちの政府だ。さて、それら金持ちの裏にかくれているのは誰か？　それはユダヤ人だ。間もなくユダヤ人を敵とする大掛かりな戦争がはじまるだろう。日本がめざすはアジアからいっさいのユダヤ的なものを追放することだ。日本の使命はアジアを救うだけでではなく、人類すべてをユダヤ人から救うことにある」
由良、ふかしていた煙草を足で踏み消し、拳銃を三浦の額に突きつける。
由良「さあ言え。古文書はどこだ。言えば生命だけは助けてやる。言わねば今この場で貴様の眉間に風 穴があく」
張りつめた空気。由良を見る三浦。
ドアが静かに開き、宝冠に白装束の次郎坊が現われる。
ふり返る由良と工藤。
由良「だ、誰だ？」
次郎坊、一瞬にして由良と工藤を打ち倒す。

○　修道院跡・敷地内Ｅ
歩いて来る安日彦。
あたりを見まわす。誰もいない。
アンデレ、突然現われ安日彦に攻撃。
一進一退の二人。
走り出すアンデレ。追う安日彦。
身軽く建物の屋根に登るアンデレ。
安日彦、追って身軽く屋根に登る。

○　同・建物の屋根の上
アンデレと安日彦。
強風で二人の衣服がはためく。
構えるアンデレと安日彦。
攻防を繰り広げる。
割れた瓦が落ちていく。

屋根が部分的に抜け落ちる。
危うく落ちそうになる安日彦。
攻めるアンデレ。
強風を受けながら防御する安日彦。
部分的に、屋根が抜け落ちていく。
なおも攻撃を続けるアンデレ。
防戦一方の安日彦。
屋根を強く踏みつける安日彦。
屋根が大きく抜け落ちる。
落下する安日彦とアンデレ。

○　同・部屋・中
屋根を突き破り、落ちてくる安日彦とアンデレ。
部屋中埃が立ち込め、瓦の欠片が落ちてくる。
ゆっくりと視界が開けてくる。
静寂に包まれている。
安日彦とアンデレの姿がない。
やがて瓦礫がガサゴソと動き、埃に真っ白の安日彦が起き上がる。
アンデレが起き上がろうとするが、瓦礫から抜けない。
もがくアンデレ。
ゆっくり近づく安日彦。
安日彦を見上げるアンデレ。
アンデレを見下ろす安日彦。
観念し穏やかな表情のアンデレ。
天井から瓦礫が落ちてくる。
天井を見上げる安日彦。
抜けた屋根から青空が見える。
すがすがしい表情の安日彦、何も言わず去って行く。
安日彦の後姿を見送るアンデレ。

○ にぎやかな通り
　人々が行き交う中を歩く安日彦。

○　静かな裏道
　歩く安日彦。

○　路地
　歩く安日彦。
　距離をおき、後をつけるモダンガール（変装したユリ）。

○　裏通り
　安日彦、角を曲がる。
　つけてきたモガ、角を曲がると安日彦がいない。
　あわてて、あたりを見回す。

○　裏道Ａ（夜）
　日は暮れて人気はない。
　制服のユリが歩く。
　後ろを気にするユリ。

○　裏道Ｂ（夜）
　歩くユリ。
　後ろから微かに物音がする。
　物陰に隠れるユリ。
　しばらくそのまま隠れるユリ。
　しかし誰も来ない。人の気配もしない。
　気を取り直し、ユリ再び歩き出す。
　街灯に照らされて地面に現われる何者かの影。

○　檜皮寮・表　　（夜）
　明かりがすべて消えている。
　檜皮寮の看板
　ユリ、一階の部屋の窓を叩く。
　しばらくして明かりがつき窓が開く。

寮生Ａ「（目をこすり）ユリさん？　こんな時間までどうなさったの？」
ユリ「親戚の人が病気でお見舞いに行ってたの。ごめん、入れてもらうわね」
寮生Ａ「それは大変でしたわね」
　ユリ、窓を乗り越え室内に入る。
　窓が閉まり、しばらくして部屋の明かりが消える。
　二階の部屋の明かりがともり、窓が少し開けられる。
　塀の陰からその様子を見ている人影。

○　同・中　（夜）
　ユリ、背を向けて着替えをはじめる。
　少し開いた窓が音もなく開き、安日彦が部屋に入ってくる。
　気づかず着替えを続けるユリ。
　文机に乱雑に置かれた古い文書。
　あぐらをかき座る安日彦、文書の横のファッション誌を手に取り、パラパラ見る。
　ユリ、着替えを終えて振り返った瞬間、雑誌を見ている安日彦に驚く。
ユリ「どこから入ったの？」
　安日彦、雑誌に目を落としたまま窓を指差す。
　ユリ、傍らにあったフェンシングのサーベルを突きつけ、
ユリ「出て行きなさい！　さもないと容赦しないから」
　安日彦、さっと簡単にサーベルを取り上げ、反対にユリに剣先を突きつける。
安日彦「訊きたいことがある。おまえ、何者だ？　日沖文書をどうするつもりだ？」
ユリ「あなたの祖先はヤマト民族に山へと追いやられた先住民族ね。国津教に伝わる日沖文書は、
その山の民が伝えてきたもの。征服者によって改竄されていない文献。私はその文献が伝える真実が知りたいだけよ」
　ユリの真剣な眼差し。
安日彦「……」
ユリ「出て行って！　大声だすわよ」
安日彦「（ふんと笑い）できるならやってみろ」
　にやりと笑うユリ。
　それを見て安日彦の表情が少し強張る。
　ユリ、大きく息を吸い悲鳴をあげる。
　安日彦、耳を塞ぐ。
　廊下に出てくる寮生たちの足音。
　ドアを叩く音。
寮生の声「ユリさん、どうかしたの？　大丈夫？」
　ユリのしてやったりの笑み。

安日彦、窓から飛び出る。

○　女子寮・表　（夜）
走って逃げる安日彦。
ユリの声「ごめんなさい。大きな油虫が出て来たもんだから驚いちゃって。でも向こうも驚いて窓か
ら出て行っちゃったから」
ユリ、窓の外を見る。走って逃げる安日彦。

○　氷川神社
境内のベンチに座っている講頭。
宝冠に白装束姿の行者がやって来て、講頭と何か言葉を交わすとすぐに去って行く。
講頭「（穏やかに）私に何か用がおありですかな？」
社殿の陰から安日彦が出てくる。
安日彦「警察が国津教の手入れをすることを知っていたのですね？」
講頭「はて話が見えませんが？」
安日彦「日沖文書を持ち去ったのはあなた方ですね？」
講頭「どうして我々だと？」
安日彦「その古文書は国体歴史篇、神伝秘法篇、兵法武教篇、そして外篇とからなることはご存知だと思います。不可解なのは、そのすべてではなく、外篇の一巻だけが持ち去られていたということです。なぜ外篇だけだったのかと考えれば、その解は自然と出てきます。それにあの隠し場所を知り得るのはあなたたちぐらいしかいない」
声を上げて笑う講頭。
講頭「なるほど、そう確信的に言われてはもはや否定もしますまい。至る所に外敵の目があります。あかし箱を手に入れようとする者たちにとって、あの古文書はその道を示す羅針盤となり得る。火に注ぐ油となりかねません。そのようになれば、あなたたちも黙しているわけにはいかなくなりましょう」
安日彦「おっしゃるとおりです。古文書を返していただければれば我々が表に出る理由はなくなります」
講頭「いま、世界が不穏な空気に包まれています。どんな小さな葛藤も今は避けたいところです。
そんなわけでちょっと預からせていただいたわけです。古文書は信頼のおける安全な場所に預けております」

○　森の中Ａ
風に揺れる木々の梢。穏やかな風が若葉を鳴らしている。
住職と青年僧が森の中を歩いている。

安日彦、住職の前に出る。
住職「どなたですかな？」
安日彦「アラハバキの安日彦と申します」
住職「ほう、老師のことはよく存じてますよ」
安日彦「今日は古文書を返していただきたくやってまいりました」
住職「（笑顔で）はい、承知しておりますよ」

○　森の中Ｂ
散策する住職、安日彦、青年僧。
住職「誰かが何かを主張すれば、誰かがそれに異を唱えます。どちらも自身が正しいとばかりに譲ることがありません。そこに理解はなく、あるのは理想や願望から生まれる葛藤と争いだけです」
安日彦「……」
住職、回りの木々をながめながら
住職「これからもっと厳しい時代になりましょう。執着は葛藤を招きます。何ものからも囚われをなくし、今この時を身軽でいることです」

○　森の中Ｃ
住職と安日彦と青年僧、森の中を歩く。
風が枝葉をゆすっている。
小鳥がさえずっている。
住職が木の実を拾い、安日彦に手渡す。
その木の実を見る安日彦。
森の中を歩く三人。
木々が風に揺れている。

○　山頂（早朝）
連なる峰々、立ち昇る霧。
朝日が昇ってくる。
朝日に仁王立ちする安日彦。

○　山道Ａ
風にさざめく木々の枝葉。小鳥の声。
歩く安日彦。

○　山道Ｂ
小川が流れている。

歩く安日彦。

○　森の中Ｃ
　歩く安日彦。
　鹿や小動物が警戒し、遠くから安日彦を見ている。
　安日彦、草の上に大の字に寝転がる。
　木々の枝葉が風にゆれている。
　枝葉の間に青い空が見える。
安日彦、目を閉じる。
　青空に白い雲が流れて行く。
高い空に鷹が舞っている。
　やがて鹿や小動物が警戒を解き、くつろぎはじめる。
　安日彦、目を開ける。
　静かに立ち上がり、動物たちを驚かさないようゆっくりと歩き出す。
　しばらく歩き走り出す。

○　雑木林
安日彦、短剣を投げる。
短剣が木の幹に刺さる。
木の陰から走り出す行者姿の太郎坊。
木の幹を蹴って飛び上がり短剣を投げる安日彦。
木の幹に刺さる短剣。
木の幹から行者の僧正坊が走り出る。
木々の間を疾風のように駈ける安日彦。
行者の次郎坊に飛びかかる。
安日彦、刀鍛冶道場にいた少年と気づく。
すばやく身をかわす次郎坊。
攻撃を仕掛ける安日彦。かわす次郎坊。

○　竹林
　太郎坊が仕込み杖を安日彦に振り下ろす。
　安日彦、交わしそれを奪う。そのとき鞘が抜け、刃がキラリと光る。
はっとする安日彦。
すぐに僧正坊が太郎坊に仕込み丈を投げてわたす。
それを受け取った太郎坊、鞘を抜き、真剣をかまえる。
安日彦に切りかかる太郎坊。
避ける安日彦。竹が二つに切れる。

一進一退。
安日彦の払った剣が、太郎坊の剣を払い飛ばす。
上段に構える安日彦。太郎坊、平常心で安日彦を見ている。
少し躊躇する安日彦。
その成り行きを見ている僧正坊と次郎坊。
太郎坊、うっすら笑みを浮かべ誘う。
安日彦、躊躇するも太郎坊に剣を振りおろす。
太郎坊、両手掌で白刃を挟み止める。
その瞬間、後ろにふっ飛ぶ安日彦。
太郎坊、受けた剣を持ちなおし、にやっと笑う。
驚いた表情の安日彦、、倒れたまま太郎坊を見る。
太郎坊、真剣を鞘に収め立ち去る。
続いて僧正坊、次郎坊も立ち去る。
安日彦、その場に大の字に寝転がる。
懐から住職に手渡された木の実を取り出して見つめる。
風の音。小鳥のさえずり。
安日彦、いきなりその木の実を口に入れガリガリ食い、笑みを浮かべる。
安日彦、小さな水の音に気づく。立ち上がり歩き出す。

○　滝
下を見ると崖から水が落ちている。
膝をついて覗き込むと、滝つぼに魚が泳いでいる。
安日彦、さらに覗き込もうとして前に乗り出す。
そのとき、懐から古文書が落ちる。

安日彦「あっ」
巻物がひらひらと開いて、滝つぼに落ちる。水しぶきがポチャンと上がり魚が逃げる。

○　繁華街（夜）
ビル街に鮮やかなネオンが点っている。
多くの人が行き来している。

○　ビヤホール・エレファント・表
「エレファント」の看板。
あたりを気にしながら店に入るモダンガール（変装したユリ）。

○　同・中

モガが入ってくる。
多くの客でにぎわう店内。タバコの煙でけむっている。
三浦と安日彦がテーブルで話している。
三浦の殴られたあとが痛々しい。眼鏡のレンズに亀裂が入っている。
モガ、ボーイに案内され席につく。
三浦と安日彦のテーブルを盗み見る。
何やら話している三浦と安日彦。
ボーイが来て注文を聞く。
隣の席の客がビールを飲んでいるのを見て、指さして同じものをたのむ。
ボーイがさがり、再び安日彦と三浦のテーブルを見ると二人がいない。
まわりを見まわすがどこにもいない。
安日彦の声「声を出すな」
ギクリとするモガ。
モガのわき腹に光る物（実はスプーン）を突きつけている。
モガ「……」
安日彦と三浦、モガのテーブル席につく。
三浦、前のテーブルから持ってきたビールジョッキとアイスクリームの皿を置く。
三浦「もういいだろ、返してくれ」
安日彦、モガのわき腹に付き付けていたスプーンをテーブルに置く。
三浦、そのスプーンを取りアイスクリームをむさぼる。
モガ、安日彦をくやしそうに睨む。
素知らぬ顔の安日彦。
三浦「この人は？」
安日彦「これから自己紹介してもらう」
荒っぽくモガの帽子とカツラを取る安日彦。
女学生のユリになる。
三浦「あっ、き、君は……」
安日彦「ブルジョアのモダンガールの正体はこのじゃじゃ馬だ」
三浦「（言葉にならず）……」
ユリ「日沖文書、渡していただけるのかしら？」
安日彦「残念だが、渡すことはできない」
ユリ「私にはそれを見る権利があるわ」
安日彦「いい加減なことを言うな」
ユリ「渡してよ。でないと大声出すから」
にやりとするユリに、ギクリとする安日彦。
ユリ、大きく息を吸う。
耳をふさぐ安日彦。

何がはじまるのかわからない三浦。
ユリの悲鳴が店内に響く。
一瞬店内が静かになる。
客もボーイもユリたちを見る。
驚いて立ち止まる特高警察の唐沢、由良、安東、工藤。
安日彦、唐沢と目が合う。
安日彦「特高だ」
ユリを残し、逃げる安日彦と三浦。
唐沢と安東がユリを捕らえる。 暴れるユリ。

〇　同・表
逃げ出してくる安日彦と三浦。
飛び出てくる由良と工藤。

〇 繁華街
走る安日彦と三浦。
三浦「彼女がつかまってしまった」
安日彦「自業自得だ。知ったことじゃない」
三浦「助けなければ」
安日彦「ほっとけばいい」
三浦「助けてやってくれ」
安日彦「なぜだ？」
三浦「なぜってうちの女学生だ。それに彼女には借りがある」

○　中立警察署・表（夜）
　周辺に武装警官を配置している。
　安日彦と三浦がやって来る。
三浦「こっちだ」
　裏に回る三浦。後につづく安日彦。

○　同・裏（夜）
　裏口から中に入る三浦、そして安日彦。

○　同・中（夜）
　忍び足の三浦、そして安日彦。
　受付で警官が机に向かっている。
　すばやく階段を上る三浦と安日彦。
　気づかずあくびをする警官。

○　同・二階（夜）
　三浦と安日彦が階段を上ってくる。
　薄暗い廊下。警官がひとり部屋から出てくる。
　安日彦と三浦、隠れる。
　隙を見てすばやく三階に上がる。

○　同・三階（夜）
　階段を上ってくる安日彦と三浦。
　何人かの刑事が残っている。
　その中に由良と工藤の姿がある。
　安日彦、彼らを指差す。うなずく三浦。
　机の影に隠れる安日彦と三浦。
　取調室とあるドアの隙間から明かりがもれている。

○　取調室・中（夜）
　薄暗い部屋。
　机をはさみ窓際にユリが座り、向かいに唐沢が座る。安東がその後ろに立つ。
唐沢「名前は？」
ユリ「……」

唐沢「やつらとの関係は？」
ユリ「……」
唐沢「女だからって手加減はしないぞ」

○　同・表（夜）
　安日彦、三浦に色々合図を送る。
　三浦、飲み込めてないままうなずく。
　すばやくドアを開け取調室の中に入る安日彦。
　　刑事たちは誰も気づかない。

○　同・中（夜）
　安日彦、入って来るなり、唐沢の首に短刀を突きつける。
　身動きできない唐沢。
安日彦「騒ぐと刺す」
　動けない安東。
唐沢「（椅子から立ち）お前、自分が何やってるのかわかってんのか」
安日彦「彼女を連れて行く」
　唐沢が叫ぼうとした瞬間、唐沢を安東に向かって突き飛ばす。
　唐沢と安東が倒れ、大きな音がする。
　安日彦、ユリの腕を掴み部屋を飛び出す。

○　同・表（夜）
　飛び出す安日彦とユリ。
　様子を見に来た工藤と鉢合わせ、蹴りを入れる。
　吹っ飛ぶ工藤。身構える刑事たち。
　逃げる安日彦とユリ。
　取調室から唐沢と安東が出てくる。

唐沢「追え、捕まえろ！」
　一斉に追う刑事たち。
　由良が拳銃の弾を確認して出て行く。
　机の下に隠れている三浦、そっと足を出す。
　足を引っ掛け、派手に転ぶ由良。

○　同・廊下（夜）
　逃げて来る安日彦とユリ。
　追っかけて来る唐沢、工藤、安東、そして刑事たち。

○　同・階段（夜）
　逃げる安日彦とユリ。
　追ってくる唐沢たち。

○　同・一階（夜）
　怒声と大勢の階段を下りてくる足音。
　受付の警官が何事かと腰を上げる。
　安日彦とユリが駆け下りて来る。
　唐沢たちが階段を下りてくる。
唐沢「そいつらを捕まえろ！」
　安日彦とユリを止めようと立ちはだかる警官。
　安日彦、警官をふっとばす。
　安日彦とユリ、正面玄関に向かう。
　追いかける唐沢たち。

○　同・表（夜）
　安日彦とユリ出てくる。
　安日彦、ユリの手を引き逃げる。
　出て来た唐沢ら刑事、二人のあとを追う。

○　表通り（夜）
　人ごみの中、逃げる安日彦とユリ。
　追ってくる唐沢ら刑事たち。

○　繁華街（夜）
　人ごみの中、ユリの手を引き逃げる安日彦。
　　追ってくる刑事たち。
　　刑事Ａがユリの手をつかむ。
　刑事Ａを当身で倒す安日彦。
　安日彦に殴りかかる刑事Ｂ。
　安日彦、それをかわして倒す。
　屋台に突っ込む刑事Ｂ。

○　路地（夜）
　ゴミ箱のかげに身を寄せて隠れる安日彦とユリ。
　すぐそばを走り抜けていく刑事たち。

密着するユリ。意識し少し動揺する安日彦。
あたりが静かになる。
ユリが立ち上がろうとするが、安日彦がしがみついていて動けない。
ユリ「ちょっと、いつまでそうしてる気？」
我にかえり、ユリから離れる安日彦。
ユリ「まったくもう」
安日彦が刑事に気づき、ユリを連れて逃げる。
追ってくる刑事たち。
刑事Ａが拳銃を撃ってくる。
屈むように逃げる安日彦とユリ。

○　民家の庭（夜）
走り抜ける安日彦とユリ。
走り抜ける刑事たち。

○　別の民家の庭（夜）
走り抜ける安日彦とユリ。犬が吠える。
走り抜ける刑事たち。
家主が顔を出し、あたりをうかがう。

○　袋小路（夜）
走って来る安日彦とユリ。
塀で行き止まりになっている。
行き止まりと知って、ゆっくりと歩いてくる刑事たち。
刑事Ａ「（首の汗を手でぬぐい）手間かけさせやがって」
刑事Ａ、安日彦に殴りかかる。
それをかわして倒す安日彦。
すぐさま刑事Ｂが殴りかかってくる。攻撃してくる刑事たち。
すべて倒す安日彦。さらに別の刑事が走ってくる。
安日彦「乗り越えるんだ」
ユリ「嘘でしょう？　こんなの無理」
安日彦、塀にユリを押し上げる。
ユリ「（安日彦を見て）ちょっと、おしり触らないでよ」
無視して強引に押し上げる安日彦。
ユリ「（悲鳴）きゃあ！」
塀の向こう側に落ちるユリ。
走りながら拳銃を撃ってくる刑事。

塀を軽々と越える安日彦。

○　川辺（夜）
走る安日彦とユリ。
立ち止まるユリ。それを見て足を止める安日彦。
ひざに手をつき荒い息のユリ。
安日彦、つながれている小舟に気づく。
安日彦、ユリの腕を掴んで小舟の方へ歩こうとする。
ユリ、安日彦の手を払い
ユリ「ちょっとくらい休ませてよ」
安日彦「あれに乗るんだ」
安日彦、強引にユリの腕を掴む。
ユリ「もうわかったわよ。乱暴にしないでよ、もう」
小舟に乗りながら。
ユリ「ほんとにもう、勝手に乗ったりして叱られてもしらないからね」
綱を解き、小舟に乗り込む安日彦。

○　中立警察署・留置場・前（夜）
鉄の扉が少し開いている。

○　同・中（夜）
看守と由良が手錠で繋がれている。
そのそばに拳銃が転がっている。
由良「貴様、こんなことしてただで済むと思うな！」
鉄格子の扉の鍵穴に鍵がささったまま開いている。
鉄格子の中に教主があぐらをかいてニコニコしている。
その前に三浦が正座している。
三浦「教主、お迎えにまいりました。私と逃げてください」
教主「（おかしそうに笑い）あんたも乱暴な事をする」
三浦「お願いです。逃げてください。でないと困ります」
教主「わしのことは心配無用じゃ。ここの居心地もそう悪くない。いま抗っても何にもならん。こうなってしまってはおとなしくしているのが生き長らえるコツじゃ。さあ、もう行きなさい。あんたまで捕まってしまったら元も子もない。あんたにはあんたの役割があるはずじゃ」
寂しげな表情をする三浦。

○ 穏やかな川（夜）
川をゆっくり下って行く舟。

小舟の上の安日彦とユリ。
黙ったまま、気まずい雰囲気の二人。
ユリ「（たまらず）ちょっと、何か言ってよ」
星を見上げる安日彦。
安日彦「（ぎこちなく）ほ、ほら、見てみろ。きれいな星空だ。この星の下では誰もが兄弟だ。争いなど愚かしい」
彼女「何わけのわからないこと言ってるのよ。口説こうたってそうはいかないから。私はあなたなんか好みじゃないんだからね」

○　川岸（夜）
舟を岸につけ、降りる安日彦とユリ。

○　山道（夜）
安日彦とユリが歩く。
人影が近づいて来る。
安日彦とユリ、走って逃げる。

○　廃寺・表（夜）
逃げて来る安日彦とユリ、立ち止まる。
前方から特高の唐沢が出て立ちはだかる。
後ろを振り返ると、工藤がやって来る。
唐沢「そこまでだ。観念しろ」
唐沢が拳銃を向ける。
ユリ、安日彦に身を寄せる。
安日彦、息を飲む。
そこへ安東が駆けて来る。
そして、唐沢に耳打ちする。
唐沢「（安東に顔を向け）なに御落胤？　確か？」
安東「自分には判断しかねます」
唐沢、ユリを見る。
唐沢をまっすぐ見返すユリ。
どこか威厳と貴賓が漂って見える。
唐沢「（安日彦を指して）こいつは？」
安東「さあ、そいつのことはわかりません」
ユリがそっと下がり、安日彦の少し後ろに立つ。
それにより、安日彦がユリの護衛のように見える。
唐沢、少し考えて、

唐沢「くそ、今日のところは見逃してやる。だが次は会ったときこうはいかないからな」
　唐沢、拳銃をしまい立ち去る。
　工藤と安東も去って行く。
　立ち尽くす安日彦とユリ。
　刑事らが視界から消えると、ユリの手首を掴み、歩き出す安日彦。
ユリ「どこいくの？」
安日彦「……」
　山門をくぐる安日彦、そしてユリ。

○　同・中（夜）
ユリ「まさか乱暴しようっていうんじゃ……」
　立ち止まり、ゆっくり振り返る安日彦。
　ユリの表情が強ばる。
　安日彦、おもむろにユリの口を塞ぐ。
　暴れるユリ。押さえつける安日彦。

○　同・表（夜）
　一人で出て来る安日彦。ほほに引っかき傷がある。
　結袈裟の乱れを整え、兜巾のずれを直す。
　そして走り出す。

○　東洋女子大学・校内（夜）
　塀の上に顔を出す三浦。
　塀を越え、校舎へ走る。

○　同・校舎・裏（夜）
　大きな石が打ち付けられ、窓ガラスが割れる。
　三浦、割れたガラスから手を入れ鍵を外す。

○　同・校舎・廊下（夜）
　三浦、足を忍ばせて歩く。
　針金でドアの鍵を開けて部屋に入る三浦。

○　同・校舎・裏（夜）
　窓からふくらんだリュックが落ちてくる。窓から三浦が出て来る。

○　同・物置小屋・前（夜）

リュックを背負い、早足に歩いて来る三浦。
人影に気づき立ち止まる三浦。
人影が近づいて来る。強張る三浦。
よく見ると英語講師のアダムである。
三浦「なんだアダムか、驚いたよ。こんなところで何してんだ？　僕も人のことは言えないけど」
アダム「三浦先生もとうとう夜逃げですか？　特高警察は恐いですからね。誰もが生命は失いたくないです」
アダム、懐から拳銃を出し銃口を向ける。
三浦「ア、アダム、どういうつもりだ！」
アダム「契約の箱をめぐって行者とエルサレムが争っているのは知ってます。我々もすでに手は打ちました。三浦先生、あなたには国津教の古文書の在り処を教えてもらいたいです」
三浦「いったい君は何者だ？」
アダム「言うとおりにしないと、死ぬことになるよ」
三浦、ちらっと物置小屋に目をやり
三浦「わかった。まだ死にたくはない。古文書はすぐ近くにあるんだ」
アダム「それはどこですか？」
三浦「その小屋の中だ」
アダム「そんな見え透いた嘘をついてもだめです」
三浦「嘘じゃない。自分で確かめてみればわかる」
アダム「なら三浦先生、あなたが取って来てください。嘘だった場合は生命はないよ」
三浦「わかった」
三浦、小屋の前の自転車をわきによせ、リュックを置く。
三浦「それじゃ行くよ」
アダム「変なまね、するんじゃないよ」
三浦、扉を開けて中に入ると、その扉を閉める。
アダム「扉は閉めてはだめです。開けておくんだ」
小屋の扉は閉まったままで、中からは何の反応がない。
恐る恐る扉を開けるアダム。中に誰もいない。
奥にあるドアに気づくアダム。
アダム「チクショウ！」
中に駆け込み、ドアを引く。
立てかけただけのドアはそのまま倒れてくる。ささえようとするアダム。
筵をかぶって隠れていた三浦が、ニヤッと笑って小屋を出て行く。

○　同・表（夜）
三浦、小屋の扉を閉め、掛け金をかける。

リュックを背負い、自転車に乗って走り去る。
小屋を叩く激しい音。銃声が轟く。

○　山道Ａ（夜）
　走る安日彦。

○　山道Ｂ（夜）
　走る安日彦。

○　山道Ｃ（夜）
　安日彦、走って来る。
　道の真ん中に講頭が立っている。
　立ち止まる安日彦。
　講頭の手に仕込み丈がある。
講頭「どちらの加勢をされる気か？」
安日彦「どちらにも加勢はいたしません」
講頭「争いをやめさせようというのですかな？」
安日彦「そんなこと考えてもいません」
講頭「では、近くで見物でもしていようと？」
安日彦「それとも違います」
講頭「ならば何を目的に行かれるのか？」
安日彦「邪魔をしてやろうかと思ってます」
講頭「邪魔？　妨害するということですか？」
安日彦「そうです」
講頭「一体どちらの？」
安日彦「どちらでもありません。彼ら双方にです」
講頭「そんなことして意味がおありか？」
安日彦「わかりません。でもかき回してやれば、いくらかは流れが変わるのではないかと、そんな気がしています」
講頭「物見客でいられたあなたを、そうやって舞台に押し上げようとするものは何でしょう？」
安日彦「胸の奥から沸々と湧く強い思いでしょうか。損得や善悪を超えているもの、言葉にするには難しい何かです」
　講頭、仕込み杖をゆっくりと抜く。刃が鈍く光る。
講頭「刀は切れるためには硬く、折れないためには軟らかくなければなりません」
　講頭、カチンと真剣を納める。
講頭「これをお持ちなさるといい。何かの役に立つはず」
　講頭、仕込み杖を安日彦に渡す。
安日彦「どうやらあなたにしてやられたような気がしています」

講頭「それは考え過ぎです。私はそんな意地悪じゃありませんよ。ただちょっと撒き餌をしたに過ぎません。あなたがそれに食いついただけのことです。それは互いの想いはさほど違わぬという現れでしょうかな」
安日彦「ひとつお聞きしてよろしいですか？」
講頭「何ですかな？」
安日彦「老師のあの手紙にはどのようなことが書かれていたのでしょう？」
講頭「そなたを好きなように使ってくれと」
講頭、豪快に笑う。
安日彦、頭を下げ横を駆けて行く。
安日彦を見送る講頭。

○　山道Ｄ（夜）
安日彦、仕込み杖を手に走る。
前方に明かりが見えてくる。
○　古劔神社・前（夜）
古ぼけた神社。
すべての燈籠に灯が点っている。
走ってくる来る安日彦。
川に架かる橋の中央で足を止める。
橋の向こうに百名ほどの白装束の行者が立ちふさがっている。
太郎坊、僧正坊、次郎坊の顔もある。
太郎坊「お前はどちら側だ？」
安日彦「どちらでもない」
太郎坊「ならばなぜここに来た？　邪魔だてするなら、その者らといっしょに蹴散らすぞ」
安日彦が振り返ると、いつの間にか橋の向こうに、黒い修道服のエルサレム教団が百名ほど立っている。
先頭に立つペテロ。そしてアンデレ、ヤコブ、ヨハネ、フィリポ、トマスの顔。
ペテロ「聖櫃がここに安置されているのはわかっている。速やかにそれをわたしていただこう」
太郎坊「わたせと言われて、易々と応じるやつがいると思うか？」
橋の上で挟まれている安日彦。
ペテロ「ならば致し方ない。力づくで奪い取るまでだ」
太郎坊「我らを侮るでないぞ。やれるならやってみるがいい」
ペテロ、小さく合図をする。
一斉にエルサレムの集団が走り出す。
太郎坊の合図で行者の集団も走る。
橋の中央で戸惑う安日彦。
安日彦、エルサレムと行者双方と戦う。

橋から飛び降りるエルサレムの集団。
同じように飛び降りる行者の集団。

○　同・橋の下（夜）
浅瀬の川。
戦うエルサレムと行者。
エルサレムがバラバラに走り出す。
行者も走る。
両者が走りながら、攻防を繰り返す。

○　同・橋の上（夜）
安日彦の攻撃する。
橋の上から落ちるエルサレム。
次々とエルサレムと行者を倒していく安日彦。
行者を倒し、境内へと走る安日彦。

○　同・鳥居（夜）
行者とエルサレムの攻防。
安日彦、走って来る。
エルサレムが攻撃をしかける。
それを倒し、走る安日彦。

○　同・境内Ａ（夜）
エルサレムを倒していく太郎坊。

○　同・境内Ｂ（夜）
エルサレムを倒していく僧正坊。

○　同・境内Ｃ（夜）
行者を倒していくヤコブ。

○　同・境内Ｄ（夜）
行者を倒していくヨハネ。

○　同・境内Ｅ（夜）
行者を倒すアンデレ。

○　同・小道（夜）
走って来るエルサレムの集団。
その前に立ちはだかる行者の集団。
にらみ合いの後、一斉に攻撃をはじめる。
戦う白い集団と黒い集団。
その中をゆっくり歩いて行くペテロ。

○　同・川のほとり（夜）
川の中に駆け込むエルサレムら。
それを追う行者。
両者、丈を使っての攻防。一進一退。

○　同・竹薮（夜）
狭い空間で戦う行者とエルサレム。
その中を悠々と歩いていくペテロ。

○　同・祠の前（夜）
太郎坊の前にヤコブが現われる。
太郎坊とヤコブが一戦を交える。

○　その後ろでヨハネと行者が戦う。

○　同・参道（夜）
安日彦の前にアンデレが立つ。
構える安日彦。
攻撃をしかけるアンデレ。
応じる安日彦。
動きの鈍いアンデレに安日彦の蹴りが決まる。
ひざまずき、わき腹を抑えるアンデレ。
アンデレを横目に先に進む安日彦。

○　町中（夜）
自転車を飛ばすリュックを背負った三浦。

○　街角（夜）
ブレーキの音とともに角を曲がる自転車の三浦。

○　坂道（夜）
　ふらふらしながらペダルを踏む三浦。

○　国津教・表（夜）
　ふらふらになりなって自転車を止める三浦。
　壊された門が閉じられている。門を押すがびくともしない。
　自転車を動かし、踏み台にして塀を乗り越える。

○　同・教団内（夜）
　静まり返っている。
　徹底的に破壊され荒れ果てている。
　三浦、走る。

○　同・社殿・前（夜）
　戸を開けようとするが開かない。
　あきらめて移動する。

○　同・裏（夜）
　雨戸を開けようとするが開かない。
　体当たりして雨戸を壊し建物内に入る。
　しばらくして、三浦が出てくる。
　膨らんでいたリュックがペチャンコになっている。
　手の平を上に、空を見上げる三浦。
　曇った空から小雨が降り出している。

○　同・表（夜）
　塀を乗り越え出てくる三浦。
　自転車にまたがり走り出す。

○　古劔神社・参道（夜）
　小雨が降っている。
　戦うトマスと太郎坊。
　悠々と歩いて行くペテロ。
　行者がペテロに攻撃を仕掛ける。
　攻撃をかわし、一撃で倒すペテロ。
　ペテロ、何事もなかったように歩いて行く。

○　同・本殿前（夜）
ペテロがやって来る。
安日彦が待っている。
ニッと笑うペテロ。
ペテロ、安日彦に攻撃を仕掛ける。
一進一退。
やがてペテロに押され始める安日彦。
ペテロの攻撃に吹っ飛ばされる。
背負った仕込み杖が転がり、鞘が抜けて刃が見える。
近くにいたフィリポが、すぐさま仕込み杖をペテロに投げ渡す。
ペテロ、仕込み杖を受け取り鞘を抜いて構える。
安日彦、鞘の抜けた仕込みを手にする。
真剣で攻撃する安日彦。
慌てず受け返すペテロ。
ペテロの攻めに危なかしくよける安日彦。
ペテロに押される安日彦。
安日彦、斬り込むも交わされて体勢を崩される。
まったく崩れないペテロ。
ペテロの剣先が安日彦の腕を浅く払う。
安日彦の腕に血がにじむ。
がむしゃらに攻撃する安日彦。
難なく軽くかわすペテロ。
斬りかかる剣は空を切り、自ら倒れる安日彦。
ペテロ、ニヤッと笑みを浮かべる。
何か吹っ切れた表情になる安日彦。
荒かった呼吸が段々静かになる。
安日彦、ゆっくり立ち上がり剣を構える。
安日彦の表情が穏やかになっている。
ペテロ、そんな安日彦を見て表情が真剣になる。
構えたまま互いに動かない。
周りで敵味方入り乱れ戦っている。
構えたまま動かない安日彦とペテロ。

○　同・鳥居（夜）
雨が強くなる。
戦うアンデレと行者。
戦う太郎坊とエルサレム。

○　同・川（夜）
一進一退のヤコブと僧正坊。

○　同・本殿前（夜）
土砂降りになり、燈籠の火が消える。
安日彦とペテロ、構えたまま動かない。
後ろで戦っている行者とエルサレム。
安日彦とペテロの手前で戦う行者とエルサレム。
安日彦とペテロ、構えたまま動かない。
暗闇に閃光。そして爆発音が空に響く。
地面が大きく揺れる。
×　×　×
戦いを止める太郎坊。
×　×　×
戦いを止める僧正坊。
×　×　×
戦いを止めるヨハネ。
×　×　×
戦いを止めるトマス。
×　×　×
戦いを止める次郎坊。
×　×　×
戦いを止めるエルサレムと行者。
本殿裏の岩山が崩れ土煙が上がる。
構えたまま動かない安日彦とペテロ。
雨が次第に弱くなる。
×　×　×
雨があがり、雲が流れ星が瞬き出す。
安日彦とペテロ、構えたまま動かない。
二人の表情が穏やかになっている。
七名の祭祀が本殿の前あらわれる。
アンデレが歩み出て祭祀らと向き合う。
アンデレ「神の祭祀いっさいはレビ族が取りしきった。そのレビ族には家系があり、神殿にかかわる儀式を担うのはモーセの兄アロン直系の子孫。契約の聖櫃を担ぐのは、さらにそのうちの「コハテ」と呼ばれるもの」
祭祀Ａ「あかし箱に触れてしまったアビナダブの息子ウザは神の怒りを受け、その場で息絶えた

。
　そなたらは聖櫃をどうお運びなさるおつもりか？」
アンデレ「あなた方がここに現れることを見越してのことである」
祭祀Ａ「我らが応ずるとお思いか？」
アンデレ「陰謀を企む者らの手には断じてわたすわけにいかない。我々はあなた方の赤誠を信じて
　いる。話せば分かり合えるはずだ」
　　構えたままの安日彦とペテロ。
祭祀Ａ「しかし岩戸はこのように固く閉じられた。開こうにも我々ではそう容易くいきますまい
。
　これも神のご意志ではあるまいか」
アンデレ「聖櫃が闇を照らす燎美になる。離散したイスラエルの末裔らが聖櫃の元に団結する。
　そして闇の勢力らに対し、受けて立つことができる」
祭祀Ａ「あかし箱が世に出たなら、争いがまた新たにはじまりましょう。今はまだ世に出る時では
　ないということではないですかな。それまでこのままそっと安置せよとのことでしょう。こうあ
　っては闇の者たちも手の出しようがない」
　　アンデレ、ペテロに目を向け、うかがいを立てる。
ペテロ「（安日彦に）日沖文書の行方はわかったか？」
安日彦「（目を反らし）まあな」
　　剣先を下ろし豪快に笑い出すペテロ。
　　フィリポがペテロの仕込み杖を受け取る。
　　剣を構えたままの安日彦。
ペテロ「すでに勝負はついている」
安日彦「勝敗は？」
ペテロ「そんなものはない。我らは戦いにきたのではない。星空の下ではみんな兄弟だ」
　　ゆっくり剣を下ろす安日彦。
　　ペテロ、胸を指で指し、
ペテロ「ただ今あるのはこれだ」
安日彦「なんだ？」
ペテロ「強いて言うなら――」
安日彦「強いて言うなら？」
ペテロ「（空を見上げ）この星空のようなものか」
　　星空を見上げる安日彦。
　　雲のない夜空に明るい星々が瞬いている。
　　ニッと笑うペテロ。
ペテロ「さらばだ兄弟！」

ペテロ去って行く。続くアンデレ、ヤコブ。
そしてエルサレム教団が一斉に走り去る。
剣をおさめる安日彦。
太郎坊が行者らに合図を出す。
法螺貝が鳴り響き、行者集団が走り去って行く。
そして太郎坊が去り、僧正坊、次郎坊も続いて去って行く。
そして祭祀たち七人も去って行く。
空がしらばんでくる。
小鳥がさえずり出す。
空にはまだ黒煙が上がっている。
三浦が息を切らせてやって来る。
三浦「やつら逃げて行ったか」
安日彦「何か爆発したようだったが」
三浦「そうか？　全然気づかなかった」
安日彦「（訝しげに見る）……」
三浦「ところで彼女は？」

○　山道Ａ（早朝）
自転車をこぐ安日彦。
荷台でしがみつく三浦。
安日彦「こんな坂道、なんで自転車なんかで来た」
三浦「借り物なんだ。置いてはいけない」

○　古寺・外観

○　同・中
青年僧が穴に土を埋めて行く。
その様子を見ている老師、住職、多聞。
住職「（安東に）手数をかけました」
安東、軽く頭を下げる。
住職「老師もお人が悪い」
老師「あのような厄介な物は人目をにつくとよくありませんからな。これもちょっとした悪戯です（笑う）」
住職「（笑い）お人が悪い」
老師「私たちはただ平和であることを願いたい」
住職「まったくですな」

○　山道Ｂ
　自転車をこぐ安日彦。
　荷台の三浦。

○ 廃寺・表
　自転車を止め、安日彦と三浦が中に入って行く。

○　同・中
　前を歩く安日彦。
　不安そうについて行く三浦。
　うめき声が聞こえてくる。
　　猿轡をされ柱に縛られているユリ。
三浦「ああ」
　　頭を抱える三浦。
　　恨めしげに安日彦を見るユリ。
　　背を向ける安日彦。
　　三浦、ユリの縄を解く。
　　ユリ、猿轡を外し、棒きれで安日彦に殴りかかる。
　　安日彦、白刃取りのように受けようとするがしくじり、棒きれがおでこに命中する。
ユリ「いったいどういうつもりよ」
　　表情をかえない安日彦。兜巾がずれている。

○　町
ユリ「なくしてしまった？」
安日彦「……」
ユリ「そんな子供みたいな嘘で騙せると思ってるの？」
三浦「滝壷の魚を見てて落っことしたらしい」
ユリ「魚？　それ本当のことなの？」
安日彦「……」
ユリ「バッカじゃないの？　あなたって私が思っていた以上にバカだったのね。子供じゃあるまいし、そんなに魚が見たかったの？」
安日彦「……」

○　氷川神社
　祭りでにぎわっている。
　露店が並び、多くの人々が行き交う。
　歩く安日彦とユリ。

自転車を押しながら歩く三浦。

三浦「岩戸が崩れたのは豪雨のためだったか、あるいはあの爆発に共鳴してのことだったか、それとも何かしらの仕掛けがされていたのか、原因の究明は困難を極めるが、まあ、何らかの意志が働いたということだろう。それは聖書にあるような、あかし箱との関わりに起こった神の意志だったのかもしれない。ともあれ一見落着というところだな」

安日彦「やっぱり爆発はあんたの仕業だったんだな？」

三浦「さあ、何のことだ？（目が泳ぐ）」

安日彦「あんたこれからどうするんだ？　特高に追われてるんだろ？」

三浦「まだ一つ二つやることがある。それをすまして僕もすぐ逃げる」

安日彦「あてはあるのか？」

三浦「そんなものいくらでもあるさ。――君も老師によろしくな」

安日彦、うなずく。

安日彦を睨んでいるユリ。

安日彦、背を向けて歩き出す。

ユリ「私はあなたをぜったい許さないからね。こんど会うときはただでおかないから、おぼえてらっしゃい！」

歩きつづける安日彦。

町人姿の太郎坊、僧正坊、次郎坊。

そして露店に見覚えのある行者たちの顔。

自然と笑みを浮かべる安日彦。

走り出す安日彦。

見送る三浦とユリ。

○　町

神輿を担ぐ男たち。

大勢の人でにぎわう町

○　山へと続く道

歩いて行く安日彦。

青空に高く鷹が舞う。

終